

# 令和4年度 前沢明峰支援学校 全体研究のまとめ

## I 研究テーマ

### 「児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践・指導実践の取組」

## II 研究テーマ設定の理由

以下の3つの観点から検討を重ね、令和3・4年度の2年次研究のテーマを設定した。

※ 詳細は令和3年度研究の中間まとめ資料(1)を参照のこと

- 1 学校教育目標から
- 2 これまでの研究から
- 3 職員アンケートから

## III 一年次の研究（中間まとめ）

全体研究テーマのもと、各学部、寄宿舎においてサブテーマを設定して取り組んできた今年度の研究の詳細は、各学部、寄宿舎の研究のまとめを参照いただきたい。ここでは、それぞれの研究の成果と課題及び第2回全体研究会での協議内容や指導助言を受けて、全体研究の成果と課題を以下にまとめる。

### (1) 成果

#### ① 年間指導計画等の作成、目標設定・評価について

小学部においては自立活動、中学部においては作業学習の年間指導計画の作成について、その内容や作成の流れについて吟味を重ね、学校教育目標や個別の指導計画の目標等との関連を意識した計画を立案することができた。また高等部においては学部内で「各教科に分けて考える視点」の共通理解を進めることにより、各教科等の目標や指導内容との関わりを意識した作業学習の目標設定や評価ができ、授業改善につなげることができた。

#### ② 授業づくりシート等の活用について

各学部において前次研究で作成した授業づくりシートの活用や改善に取り組んだ。学部ごとに自立活動の目標や関連する各教科等の目標・指導内容を記載する欄を設定したことが、それらを意識した授業づくりにつながった。また、学部職員の多くがシートの作成やシートを活用した授業実践に直接かかわることにより、学部として目指す授業づくりについての共通理解を進めることができたと考える。

また、寄宿舎においては個別の生活指導計画に基づく、実践記録シートを作成し、その活用により、指導員間で共通理解を進めたり、手立てについての意見交換を行ったりすることができた。

#### ③ 授業改善の取組について

各学部において、授業実践を中心とした研究活動に取り組み、小学部においては全ての学級で、中学部、高等部においては全ての作業班で授業実践について検討する機会を得た。それぞれの実践において、授業の成果や課題を明らかにし、改善策について意見交換を行ったことは、今後のさらなる授業改善にもつながると考える。また普段直接かかわることの少ない児童生徒への共通理解を進める機会になったことも一つの成果だったと言える。

#### ④ 訪問学級の児童、取組の共通理解について

第3回授業研究会の提案授業として、訪問学級の授業を設定した。現在本校の訪問学級は小学部1学級（2名）のみであり、多くの職員は訪問学級の取組を目にする機会ほとんどない。今回の授業研究会において、リモート形式での授業の様子を全職員で参観し、その取組や児童の学習の様子について意見交換を行ったり、指導助言をいただいたりしたことは、学校全体の訪問教育に関する理解を深めることにつながった。こういった取組は、今後も何らかの形で継続していきたい。

### (2) 課題

#### ① 授業づくりシートと各教科等の目標・内容の関連について

各学部において、それぞれの実情に合わせて作成した授業づくりシートを活用して、各教科等の目標・内容を意識した授業実践に取り組んできた。職員アンケート等では「計画の段階での意識付けはできたが実践まで至っていないのではないか」等の意見もあり、今後はこれまで以上に各教科等を合わせた指導の学習内容が各教科等のどういった目標・内容と関連しているのかを明確におさえた実践と評価をしていく必要がある。

#### ② 授業づくりシートの様式について

授業づくりシートの様式に関しては、中学部において「生徒の実態が分からない」等の課題があげられた。様式を簡素なものにすることは運用のしやすさにつながるが、必要十分な内容を網羅していなければ、シートを有効活用できず本末転倒となる。小学部においては「単元計画シートと指導案を両方書くことが負担だった。中学部のように同じシートの中に盛り込むなど簡単に書き込める様式がよい」といった意見が出されており、これまでは学部の実情に合わせてそれぞれで様式を作成してきたが、次年度についてはそれぞれの様式の良さを取り入れることで、より実用的なものに改善していくことも必要だと考える。

#### ③ 全体研究会での指導助言から

第2回全体研究会において岩手大学大学院教育学研究科の佐々木全准教授から貴重な指導助言をいただいた。助言の内容を大まかにまとめ、次年度への課題と捉える。

- 「できる状況づくり」はICFで言う「環境因子」を整備することである。「できる状況づくり」の具体的内容を探索、構想するための視点が必要である。これらを「ヒト（伝達と共感）」「モノ（道具と場の設定）」「コト（活動内容と展開）」の三観点で整理することが新たな価値観を生み出すことにつながるかもしれない。また、課題分析（見立て）と実態把握（見取り）が手立ての精度を担保する。

- 手立てについては「事前」「事中」「事後」の時系列における三観点で評価するとよい。
- 支援の手立てとしての「できる状況づくり」は教育目標の実現状況への貢献を持って評価される（効果があったか、どのような機序をもって効果があったのか）。ここでは「児童生徒の学習状況」が「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述される必要がある。
 

【例】 教師が床に付したラインを指差し「ほら」と声をかけると、それに気がついて脱いだ靴を所定の位置に置き直すことができた。
- 評価の記録については、例えば「自主的・自立的に行動したとき」→○、「注意喚起を要したとき」→□、「行動の指示を要したとき」→△、等のようにすると分かりやすい。

#### IV 二年次の研究

##### 1 研究の内容と方法

- (1) 研究の基本構想と共通理解
- (2) 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進
- (3) 授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組
- (4) 研究のまとめ

##### 2 研究組織

以下の研究会等については、校長、副校長以下、直接児童生徒とかかわる職員全員の参加を基本とする。（令和2年度年度末反省会で確認）

###### (1) 全体研究会 第1回：5月28日 第2回：12月24日

- ① 全体研究の内容、計画、まとめなどについて協議し、その内容を共有する場とする。
- ② 各学部、寄宿舎の研究について意見交換を行い、研究内容の充実を図り、共通理解を進める。

###### (2) 学部研究会（毎月）、寄宿舎研究会（年5回）

各学部、寄宿舎の研究を推進する。詳細は各学部、寄宿舎の計画による。

###### (3) 授業研究会（年3回 9月：高、10月：中、12月：小）

- ① 各学部の研究に基づく提案授業により、全校での授業研究会を行い、研究内容や推進状況について協議を行う。各学部の児童生徒の実態について共通理解を深める場としても活用する。
- ② 研究協議は小グループによるワークショップ型を基本とするが、授業内容や授業者の希望等を受けて柔軟に対応する。
- ③ 研究会終了後に参加者へのアンケートを実施し、その内容をまとめたものを研究会の記録と合わせ職員に還元し、研究推進に役立てる。

## V 研究計画

本次研究は令和3～4年度の2年次研究とし、年度末にそれぞれの年度の研究のまとめを行う。令和4年度末に研究集録（明峰の実践第20号）を発行する。研究計画を【表9】に示す。

【表9】研究計画

一年次（令和3年度）の研究計画	二年次（令和4年度）の研究計画
1 全体研究テーマ、研究の構想の提案	1 二年次の研究計画の見直し
2 各学部研究、寄宿舎研究の内容、計画の立案	2 授業実践、指導実践
3 授業実践、指導実践	3 授業研究会（年3回）
4 授業研究会（年3回）	4 講演会の実施
5 講演会の実施	5 研究のまとめ
6 一年次の研究のまとめ	6 研究集録の作成

## VI 研究推進にあたって

### 1 学校教育目標等から（一年次の研究からの継続）

#### （1）学校教育目標から

学校教育目標に掲げられている「自立的・主体的な生活」を送るための「児童生徒一人ひとりが個性と能力を發揮し、可能性を最大限に高め」られる状況について考えてみる。名古屋（2019）は「自立的・主体的生活を実現するために一人ひとりに最適な支援的対応をしていくことが求められます。これを『できる状況づくり』と言います」としており、自立的・主体的な生活につながる最適な支援的対応として「できる状況づくり」を提唱している。また、「『できる状況』とは『精いっぱい取り組める状況』と、『首尾よく成し遂げられる状況』を一人ひとりに的確に用意していくこと。その子なりのよい姿が実現するように」としており、研究テーマに迫る一つの方法として、「できる状況づくり」を意識した実践を進めていきたい。

#### （2）取組方針の具体的手立てから

学校教育目標には「取組方針の具体的手立て」として①主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と観点別評価の実施、②指導内容・方法の共有と技術の向上の2点があげられている。

「主体的・対話的で深い学び」は新学習指導要領において「授業改善の取組を活性化していく視点として」<sup>5)</sup>位置づけられたもので、新井（2019）はこれらを【表10】のようにまとめている。

【表10】「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」

主体的な学び	学ぶことの興味や関心／自己のキャリア形成との関連付け、粘り強い取り組み／学習活動の振り返り、次につながる学び
対話的な学び	子供同士の共同／教師や地域の人との対話／先哲の考えをもとに考える
深い学び	習得・活用・探究という学びの過程／知識を相互に関連付ける／情報の精査と考えの形成、思いや考えを基に創造する

※中教審答申より著者（新井）が抜粋。一部に要約した箇所がある。

また、名古屋（2019）はこれらが「（新学習指導要領で示された育成すべき資質・能力の）『知識及び技能』『思考力・判断力・表現力』『学びに向かう力、人間性等』の3つの柱の習得を図る重要な概念である」としており、観点別評価の3観点である「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」と合わせて、研究の推進にあたってはこれらを意識した授業実践、授業改善、評価が必要である。

## 2 一年次の研究の課題から

### （1）授業づくりシートと各教科等の目標・内容の関連について

職員アンケートなどにおいて「計画の段階での意識付けはできたが実践まで至っていないのではないか」等の意見もあることから、2年次の研究においては、1年次以上に各教科等を合わせた指導の学習内容が各教科等のどういった目標・内容と関連しているのかを明確におさえた実践と評価をしていく必要がある。

### （2）授業づくりシートの様式について

1年次の研究においては、それぞれの学部の実情に合わせて様式を作成してきたが、2年次についてはそれぞれの様式の良さを互いに取り入れるなどして、より実用的なものに改善していくことを検討する。

### （3）全体研究会での指導助言から

1年次の研究において岩手大学大学院教育学研究科の佐々木全准教授からいただいた指導助言の中から、特に以下の点を研究活動に取り入れる。

- ① 「できる状況づくり」の具体的内容を探索、構想するための視点として「ヒト（伝達と共感）」「モノ（道具と場の設定）」「コト（活動内容と展開）」の三観点で整理する。
- ② 手立てについては「事前」「事中」「事後」の時系列における三観点で評価する。
- ③ 「支援の手立て」はその意図が分かりやすいように「○○できるように、□□する」等のように記述する。
- ④ 「できる状況づくり」の評価は「児童生徒の学習状況」が「児童生徒の姿」と「支援の手立て」との関連で記述する。

【例】 教師が床に付したラインを指差し「ほら」と声をかけると、それに気がついて脱いだ靴を所定の位置に置き直すことができた。

- ⑤ 評価の記録については、例えば「自主的・自立的に行動したとき」→○、「注意喚起を要したとき」→□、「行動の指示を要したとき」→△、等のような分かりやすい方法を取る。
- 行動したとき」→○、「注意喚起を要したとき」→□、「行動の指示を要したとき」→△、等のようにすると分かりやすい。

## VII 研究の実際

### 1 研究の基本構想と共通理解について

#### (1) 第1回全体研究会

5月28日に第1回全体研究会を実施し、研究会後に研究会の内容及び資料などについてアンケート調査【図2】を行った。研究会の参加者は61名で、当日参加できなかった職員を含め86名から回答を得た。

質問(2)「今回の研究会の発表内容(配付資料の内容)はわかりやすいものでしたか。」に対する回答のまとめを【表11】に示す。

この質問に対しては86名中80名(93.0%)の肯定的回答が得られた。令和3年度に実施したアンケートの同じ質問の結果と比較しても、肯定的回答が80.4%から93.0%に増え、否定的な回答(4.3%→1.2%)や無回答(15.2%→4.7%)の割合が大きく減っていることが分かる。二年次研究の2年目ということもあり、全体研究や各学部・寄宿舍の研究が目指すところや研究内容、方法についての共通理解が進んできた結果だと考える。

【図2】第1回全体研究会アンケート様式

【表11】第1回全体研究会アンケート「発表内容及び資料は分かりやすかったか」への回答

	よくわかった	だいたいわかった	少しわかりにくかった	わかりにくかった	無回答
令和4年度 N:86	23名 (26.7%)	57名 (66.2%)	1名 (1.2%)	0名 (0.0%)	4名 (4.7%)
	肯定的回答 80名 (93.0%)				
【参考】 令和3年度 N:92	24名 (26.1%)	50名 (54.3%)	4名 (4.3%)	0名 (0.0%)	14名 (15.2%)
	肯定的回答 74名 (80.4%)				

また、このアンケートの自由記述には「全体→各学部、一貫性がある確認しやすい」「各学部の研究計画概要がA4 1枚にまとめられていたので比べて見やすく、また分かりやすい」「要点がまとまって良かった」「二年次(継続)ということもあり、充実した内容だった」等の回答があり、昨年度から継続して行っている、全体研究、各学部・寄宿舍の研究計画案の様式の統一等の取組が肯定的に受け止められていることがうかがえる。

一方、同じく自由記述の回答に「資料中の用語について定義がはっきり示されていると共通認識がもてるのではないか」という意見もあり、研究を進めていく中で必要な部分についてはその都度確認していく必要がある。

## (2) 第2回全体研究会（本日）

全体研究及び各学部、寄宿舍の研究について、まとめの報告を行い、その内容について協議、意見交換を行う。また、助言者として岩手大学大学院教育研究学科佐々木全准教授を招聘し、研究内容に関する助言をいただく。

## 2 全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舍の研究計画の作成と推進について

各学部、寄宿舍研究のまとめの報告による。

## 3 授業実践とPDCAサイクルによる授業改善の取組について

### (1) 授業研究会の開催

年度初めの計画に沿って、各学部1回の授業提案による授業研究会を実施した。概要を【表12】に示す。

【表12】令和4年度授業研究会の概要

	研究会期日	内容・対象	単元名	参加者数
第1回 小学部提案	7月8日 (金)	国語科 小学部2年1組	クイズをしよう！	53名
第2回 中学部提案	9月28日 (水)	作業学習 クラフト班	ビー玉なべしきの製作	49名
第3回 高等部提案	11月18日 (金)	作業学習 縫製班	作業製品を作ろう ～マル満工房へ納品しよう	40名

### (2) 授業研究会まとめ資料の作成

それぞれの研究会において協議された内容と助言をまとめた資料を作成し、校内ネットワークを通じて全職員に配信した。まとめ資料の例（抜粋）を【図4】に示す。その内容については各学部の研究に関わる貴重な資料として活用している。

令和4年度授業研究会③ まとめ資料

令和4年12月5日

実践研究部

1 研究会の概要

- (1) 日 時 令和4年11月18日(水) 15:40~18:50
- (2) 講演者 高野部 作業学習 稲葉 稲 「作業製品を作ろう〜ヘルメット加工〜納品しよう」(11月11日(金) 2~4校時実施)
- (3) 対 象 高野部 1~3年生
- (4) 担 当 者 外務部 稲葉 稲 (T1)、小原 博代 (T2) 他
- (5) 参 加 者 40名(指導助言者1、授業者2、進行1含む)

2 ワークシートのおまめ

(1) ワークシートに貼り付けられた付箋の枚数

	A 6名	B 9名	C 6名	D 7名	E 8名	計 36名	グループあたり	参加者 1名あたり
成果	8	20	20	17	16	81	21.2枚	2.9枚
課題・改善策	2	10	4	7	2	25		
計	10	30	24	24	18	106		

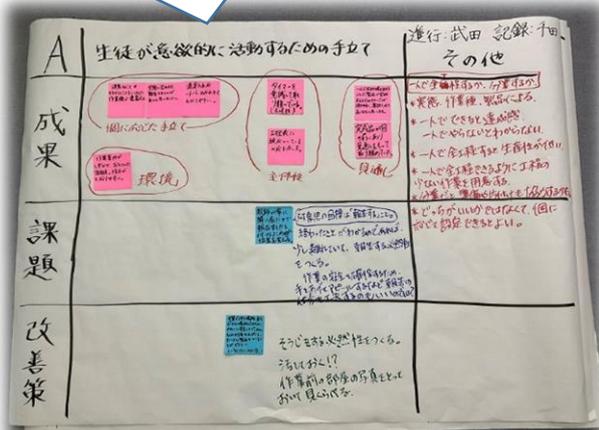
研究会の概要

ワークシートのおまめ

(2) 各グループで作成したワークシートの内容

	Aグループ 進行:武田 記録:千田	協議の柱①	その他
成 果	【欄に記した手立て】 ・好きなことや得意なことを生かした作業種が豊富だった。 ・実態に合わせた報告スタイルが良いと思いました。 ・道具入れが一人一人分かれていて分かりやすい。 【環境】 ・作業室が静かで落ち着いた雰囲気。指示が通りやすい 【主体性】 ・タイマーを言葉にして取り組んでいる(主体性)。 ・工程表に絵がついているのが良かった。 【見通し】 ・一人で全工程を行うことで、製品が完成するまでのイメージが湧きやすく、意欲もより高くなると思います。	生徒が意欲的に活動するための手立て	一人で全工程するか、分業するか ○業務、作業種、製品による。 ○一人でできることと達成感。一人でやらないと分からない。 ○一人で全工程すると生産性が低い。 ○一人で全工程ができるように、工程の少ない作業を用意する。 ○どちらがいいかではなく、個に応じて設定できると良い。
課 題	○教師が常に隣にいたので、報告する力をつけるために位置を変える。 ○対象生徒の目標は「報告すること」。終わったことが分かるのであれば、少し離れていて、報告する必要性を作る。 ○作業の安全性を確保するため、手を挙げてアピールするなど、報告の仕方を工夫するのも良いのでは。		
改 善 策	○全員で使う場所、自分だけの場所ではない。きれいにすることでみんなのやる気も上がってたくさん製品を作ることができる!というところにつなげる。 ○帰属する必要性をつくる。 ○待つとき ○作業前の整頓の写真を撮っておいて、見比べる。		

実際に作成したワークシートの写真



指導助言のスライドの例

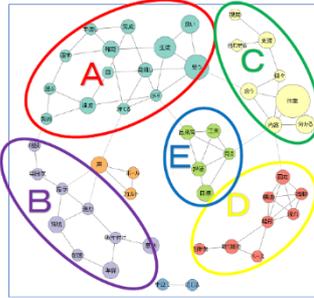
テキストマイニングによるキーワードの図式化

(4) 共起ネットワーク図を用いたキーワードの抽出とグループ化によるワークシートのおまめ

(2)の手順に沿って、抽出したキーワードをグループ化し、成果と課題をそれぞれ5点にまとめた。

① 成果

- A: 完成した製品を手元に置くこと等により生徒が見通しも持って取り組むことができていた。
- B: 準備から後片付けまで意欲的に取り組める環境が整えられていた。
- C: 作業内容が分かるように個々の生徒に合わせた支援がなされていた。
- D: 活動場所や活動の流れが固定されるなどの構造化がなれていて、生徒が主体的に取り組んでいた。
- E: 目標、評価、出来高を生徒が見ることができる工夫がされていた。



【Aグループ】

思う、生徒、良い、見通し、完成、確認、示す、持てる、目、達成、手直し、直す、選ぶ、製品

【Bグループ】

環境、指示、進む、配置、準備、後片付け、意欲、雰囲気、相談

【Cグループ】

作業、内容、分かる、個々、合う、支援、合わせる、視覚

【Dグループ】

取り組む、ベース、主体性、場所、流れ、構造、固定、活動

【Eグループ】

目標、評価、出来高、工夫、見る

3 指導助言 岩手大学大学院教育学研究科 佐々木 全 准教授

協議の柱

生徒が意欲的に活動するための手立てについて

- ・「できない、わからない」=知識・技能が提供されない状況だと主体的な態度にもつながらない
- ・3つの資質・能力を習みながら「やってみよう、やれそう」という達成動機、目標、見通しをもてるような活動、支援がなされるとよい。

①製品づくりは「一人で全工程を行う方法」と「分業する方法」のどちらがよいか。

- ・この問いが一般論(抽象的)か、各論(具体的)かによって議論が変わってくる。
- ・作業学習一般として考えると、多様な子どもたちに合う、多様な工程が含まれている作業がよい。
- ・純粋作業は分業化しづらい、という特性がある。
- ・製品レポートカードをもって対応するといふのではない。
- ・單元導入において全工程を体験し、そのあと自分の専門とする工程を選択するのもあり。

②製品づくりに直接つながらない準備や後片付け等の活動に意欲的に取り組むための支援

- ・片付けは目標として明確に効果的に、日常生活の習慣と同じく、決まるとよい。
- ・働きたい生徒が「働く」というルーティンを獲得していくような支援ができればいい。
- ・「主たる活動」「従たる活動」という考え方。

授業を参照しての課題

- ・手掛けた製品が社会的な評価を受けるということがちゃんと想定された單元構想。販売が計画されており、それはとても重要なこと
- ・3観点での手立ての整理を続けてほしい。

③授業改善に向けて

- ・ICT機器を使って録画しているところを拡大して確認しながら指示を出す。
- ・指示の内容が画像として記憶されている、という状況ができれば有効

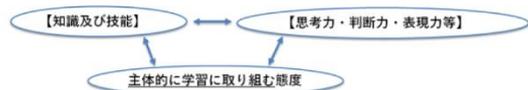
指導助言のおまめ

前沢明峰支援学校校内研究会

協議の柱：生徒が意欲的に活動するための手立てについて

【知識及び技能】 【思考力・判断力・表現力等】 【主体的に学習に取り組む態度】

- ・事前 やってみたい、やれそう、おもしろそう (達成動機、目標、見通し)
- ・事中 できる手ごたえ、もっとやりたい、もっとやれるぞ、心地よさ (できる状況、個々の手順の面白さや進捗の手ごたえ)
- ・事後 やったぞ、やりとげたぞ (満足感、成就感、進捗達成)



【図4】授業研究会のまとめ資料の例

### (3) 授業研究会におけるアンケートの実施

各授業研究会においては、参加者全員を対象に記名式のアンケートを実施した。様式を【図5】に示す。主な質問は①グループ協議が活発に行われていたか、②授業の成果と課題は明確になっていたか、③協議された内容が自身の今後の実践に役立つと思うかの3点だったが、ここでは授業研究会が参加者各自の学びにつながったかどうかという観点から全3回のアンケートの質問③の結果を【表13】に示す。のべ134名からの回答のうちのべ126名(94.0%)から肯定的回答を得た。

【表13】質問「研究会で協議された内容が今後の実践に役立つと思うか」への回答

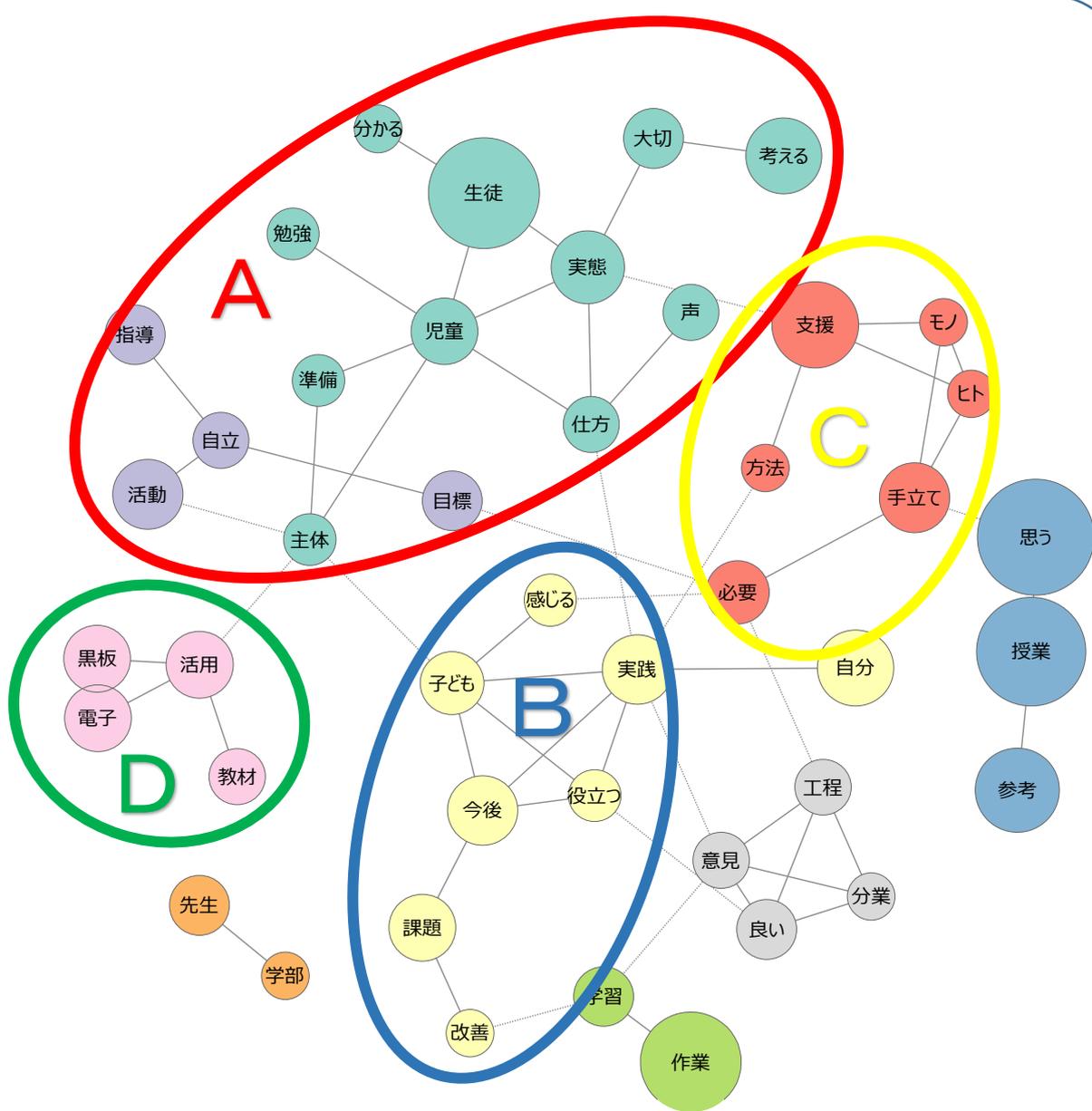
	そう思う	だいたい そう思う	あまり そう思わない	そう思わ ない	無回答
第1回(小) N:50	22名 (44.0%)	25名 (50.0%)	2名 (4.0%)	0名 (0%)	1名 (2.0%)
	肯定的回答 47名(94.0%)				
第2回(中) N:48	26名 (54.1%)	18名 (37.5%)	2名 (4.2%)	0名 (0%)	2名 (4.2%)
	肯定的回答 44名(91.7%)				
第3回(高) N:36	23名 (72.2%)	12名 (33.3%)	1名 (2.7%)	0名 (0%)	0名 (0%)
	肯定的回答 35名(97.2%)				
令和4年度計 N:134	71名 (52.9%)	55名 (41.0%)	5名 (3.7%)	0名 (0%)	3名 (2.2%)
	肯定的回答 126名(94.0%)				

また、これらの肯定的回答についての具体的内容の記述を求めた質問では、様々な観点から数多くの記述が見られた。これらからテキストマイニングによりキーワードを抽出して共起ネットワーク図を作成し、キーワードをグループ化した。【図5】

ここから、今年度の授業研究会の個々の学びをおおまかに以下の4点にまとめる。

- A : 児童生徒の実態を考えることの大切さ、自立につながる児童生徒主体の目標や活動の設定と教師の指導について
- B : 今後の実践に役立てるために、課題や改善策について考えたり意見交換をしたりすることについて
- C : 「ヒト」、「モノ」、「コト」の3観点での支援の手立てについて
- D : 電子黒板等のICT機器の活用について

※ 網掛け部はテキストマイニングにより抽出したキーワード



- A: 生徒、児童、実態、大切、考える、仕方、勉強、準備、主体、目標、自立、活動、指導、声
- B: 子ども、今後、実践、役立つ、感じる、課題、改善策
- C: 支援、モノ、ヒト、手立て、方法、必要
- D: 活用、教材、黒板、電子

【図5】 肯定的回答の具体的記述から作成した共起ネットワーク図

#### 4 岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会講演会の開催について

標記講演会は新型コロナウイルス感染症対策のため、講師及び外部からの参加についてはオンラインとし、校内でも会場を分散させるなどの感染予防措置を取った上で開催した。

- ① 日時 令和4年8月2日(火) 10:00~12:15
- ② 場所 前沢明峰支援学校 多目的ホール他
- ③ 講師 米田 宏樹氏(筑波大学 人間系 准教授)
- ④ 演題 「児童生徒の自立的・主体的な生活につながる授業実践・指導実践の取組」
- ⑤ 対象 本校教職員、県内の支援学校教員、地域の小中学校教員(参加57名)

### Ⅷ 研究のまとめ

全体研究テーマのもと、各学部、寄宿舎においてサブテーマを設定して取り組んできた今年度の研究の詳細は、各学部、寄宿舎の研究のまとめを参照いただきたい。ここでは、それぞれの内容を受け、全体研究の成果と課題をまとめる。(以下、「」部は各学部のまとめからの引用)

#### 1 成果

##### (1) 授業改善の取組について

小学部においては様々な教科において「自立活動の指導が教科の力を支えるという意識のもと」「自立活動の視点を踏まえた授業づくり」を行うことで「主体的に学ぶ児童の姿を引き出すことができた」こと、中学部においては対象として抽出した10名の生徒への支援の手立ての実施により、多くの成果をあげたり、新たな課題を明確にしたりすることができたこと、高等部においては「作業班の指導者が共通した観点で生徒の指導を繰り返した」ことにより「生徒の主体性や自信につながった」こと等、各学部において授業改善の取組の成果が報告された。

##### (2) 授業づくりシート等の活用について

各学部でそれぞれに運用しやすい様式を検討してきた授業づくりシートについては、小学部においては「シートの使い方に慣れ」、「学部研究会の協議においても、教科や自立活動のねらいを共通理解するツールとして有効に活用」できたこと、中学部においては「様式の中に『本時の活動に関わる生徒の実態と関する教科の目標・内容』の欄を追加した」ことにより、限定的ではあったが「担当者間、学部内の生徒や学習内容等の共通理解につながり」、「関する教科等の目標・内容を記入」したことで「個別目標の設定に関して、より各教科等との関連を意識すること」につながったこと、高等部においては学部研究会でのワークショップにより、シートを通して「生徒の実態について情報交換」をしたり、「課題や目標を共有」したりすることができたこと等が報告された。各学部でそれぞれの実情に合わせて作成した授業づくりシートであるが、小学部においては単元計画シート、高等部においては授業記録シート、中学部においてはその両方の作成に取り組んできた。どれも授業改善につながる取組の中で有効に活用されたことが報告されているが、一方で日常の授業において継続的に作成していくことは、時間的にも労力的にも難しいという現実もある。しかし、例えばこれまでの実践

のように学部研究の取組として年に数回作成すること等が、教員のスキルアップにつながるという  
ような研修的な側面としても活用においても十分な成果をあげることができる。と考える。

また、寄宿舍においてはこれまで作成してきた「実態記録シート」に加え、新たに「生活指導計画  
組み立てシート」を作成したことにより「舎生の実態や取り巻く環境について整理することで指導の  
手立てを導き出しやすかった」こと、「指導員間での共有がしやすかった」こと等が報告された。

### **(3) 「ヒト」「モノ」「コト」の3観点による支援の手立ての整理について**

岩手大学大学院の佐々木全准教授からの指導助言による、「ヒト」「モノ」「コト」の3観点での支  
援の手立ての整理については、今年度も各学部で継続して取り組んできた。小学部においては「(学  
部研究会の) グループ協議でより具体的な意見を出しやすくなったほか、話し合いの方向性のずれが  
少なくなり、職員間で意見を共通理解して授業改善につなげやすくなった」こと、中学部において  
「(授業づくりシートの記載において3観点合わせて) 22点の支援の手立て」を組み、その評価にお  
いては成果として「計25点の記述が見られた」こと、高等部においては「(生徒) 個人の活動内容に  
ついての支援を『ヒト』『モノ』『コト』に分けて」考えたことにより「生徒への支援が細かいところ  
まで統一」され、「スムーズに活動に取り組む」こと等、「それぞれの目標の達成につながった」こと  
等が報告されている。

### **(4) 今後の実践につながる各学部での取組について**

今年度は小学部においては自立活動の視点を踏まえた各教科等、中学部、高等部においては作業  
学習の授業改善に取り組んできたが、それぞれに今後の実践につながると思われる成果が報告され  
ている。小学部においては「学部研究会における授業実践発表を通して、普段は見る機会の少ない他  
学級の児童の実態や教科及び自立活動の指導の実際を共有する」ことや「グループ協議をとおして得  
られた授業改善にアイデアは他学級でもすぐに生かすことのできることも多く、職員の支援の質を  
高めることにつながった」こと、『『児童が主体的に学ぶ姿』を引き出すことができた要因を学部職員  
で話し合い、整理してまとめることができた』こと等が報告された。中学部においては「実践をと  
おして新たな課題があげられ、学部研究会のグループワークの中でそれらの課題の改善策について意  
見交換を行うこと」ができ、今後の実践において「より具体的な支援の手立てにつながっていく」と  
考えられること等が報告された。高等部においては「作業学習における『育成を目指す資質・能力』  
について共通理解することで単元や個人の目標設定が具体的に」なり、「3観点に沿って目標設定が  
でき」「目指す方向性が一致したことで統一された指導」につながったこと等が報告された。どれも  
次年度以降の様々な授業の実践の中で活用できる成果である。と考える。

### **(5) 学部研究、寄宿舍研究に関する職員アンケートから**

各学部とも今年度の学部研究に関わる職員アンケートを実施した。小学部においては「授業実践  
の前後で授業づくりへの意識はどう変わりましたか」の質問に対する自由記述の回答で「自立活動  
と教科の関連を意識するようになった」等の「授業づくりに対する意識の変化」や「職員間で意見  
交換をすることで、様々な視点に気付くことができた」等の「学部研究会をとおしての新たな気付  
き」等が報告された。中学部においては学部研究会の中のグループワークの成果を問う質問に対す

る自由記述の回答において「作業班内の共通理解や、他の作業班との情報交換の機会となった」「実際の指導に活かすことができた」「実際に関わっている生徒の難しい部分、できる部分を伸ばす指導についてじっくり考えるきっかけになった」等の記述があったことが報告され、学部研究会の内容が、直接授業改善につながったことが分かる。

また、寄宿舎研究においては「生活指導計画組み立てシート」の作成が指導の手立ての「根拠を導き」やすく、「成果と評価を意識して考えること」につながったことや棟会（棟ごとの指導員の連絡会）の中で「日常的に話し合い、支援方法を探ることができた」、「対象舎生について指導員が同じ目線で考えることができることは、舎生、指導員双方にプラスになった」こと等が報告された。

## 2 課題

### (1) 授業づくりシート（単元計画シート、授業記録シート）について

各学部で様式を作成して運用している授業づくりシートについては、小学部において「実践を終えての評価を確実に実施し、授業改善の手がかりとして活用していけるような仕組みづくりが必要」であること、中学部においては2種類のシートをより活用しやすい形にするための工夫が必要であり、改善のアイデアが提案されるとともに、次年度以降の実践の中でより良い形を検討していくこと」が必要であること、高等部においては授業記録シートが「日常的に活用し、次の授業、次の単元へとつなげていくことで最大の効果が得られる」ものであると考えることから「生徒の実態や活動内容」等を「日常的に記録できるようなシートの活用方法を考えていく」ことの必要性が報告された。

また、寄宿舎では指導員の「観点別評価についての理解が不足している」「(観点別評価についての) 学習の機会を設ける必要がある」などの反省が報告され、指導員の研修の必要性と、より「日常的に使用できる実践的な様式の検討」や「評価方法のマニュアル化」の必要性などが課題として報告された。

### (2) 次年度以降の授業実践・指導実践に関わって

各学部の実情により、次年度以降の実践に関わる課題も報告されている。小学部においては「各教科における一斉指導形式での授業づくりに力を入れてきた」が、この指導形態の効果について「今後も検証するとともに、より効果的な指導形態の在り方を模索していく必要がある」ことが報告された。中学部においては職員アンケートによる作業学習に実施方法についての質問への回答から、「今年度から始めた通年方式が良い」という一応の結果は出されているが、より良い実施方法については継続して検討していく必要があることが報告された。また今年度の実践において「各教科等を合わせた指導」の目標設定に関わっては「各教科との関連を意識」することができたが、「評価においても、その授業（単元）における成果や課題が、各教科等の目標・内容のどの部分に関連するものなのか、どの部分で成果が上がったのかが分かりやすい様式や記述の仕方について検討する必要がある」ことも報告された。高等部においては高等部作業学習における「育成を目指す資質・能力」について一定の成果をあげることはできたが「まだ定着には至っておらず、目標設定や評価の視点に活用でき

なかった」という意見も出されており、次年度以降も目標設定、評価について「育成を目指す資質・能力」の観点の活用が必要であることが報告された。

また寄宿舎では研究に関わって「通常以上に棟会に時間を費やしている」ことや「もっと掘り下げて指導にあたる時間が欲しかった」などの反省が出され、より効率的な研究実践、指導実践の必要性が報告された。

### 3 次年度以降の実践研究について

本校では「児童生徒の自立的・主体的の生活につながる授業実践（指導実践）の取組」の研究テーマのもと令和3年度からの2年次研究に取り組んできた。今年度がまとめの年度となり、各学部、寄宿舎の実践のまとめ、全体研究のまとめについて報告したところである。

次年度以降の研究については、今回の研究の成果や課題、このあと実施する職員対象のアンケートをもとに新年度に入ってから提案する予定である。今回の職員アンケートはMicrosoft Formsを使用する実施となるがこれまで同様100%の回収率を目指して実施するのでご協力いただきたい。

#### 【参考・引用文献等】

- 1) 前沢明峰支援学校（2022）：令和3年度 研究の中間まとめ資料 前沢明峰支援学校 HP
- 2) 佐々木全（2021）：令和3年度前沢明峰支援学校 第2回全体研究会資料
- 3) 名古屋恒彦（2019）：「各教科等を合わせた指導」エッセンシャルブック，ジアース教育新社
- 4) 岩手大学教育学部附属特別支援学校（2018）：第22回学校公開研究会 全体会資料
- 5) 文部科学省（2019）：特別支援学校学習指導要領 解説総則編
- 6) 新井英靖（2019）：特別支援学校新学習指導要領を読み解く「各教科」「自立活動」の授業づくり，明治図書
- 7) 前沢明峰支援学校実践研究部（2020）：実践研究部通信 No. 15（学校フォルダに保存しています）
- 8) 佐々木全（2021）：令和3年度前沢明峰支援学校第2回全体研究会 講義資料